

歴史的想像力の育成

兵庫県立大学環境人間学部 鄭 成

大学の歴史教育はどのようにすれば、他国への理解を深められ、その上に歴史和解にも寄与できるのか。これは、報告者がここ数年考え続ける問題である。

きっかけは、中国と韓国の歴史についての実感は薄い、という学生からよく聞いた声である。声を上げた学生たちは、高校の世界史勉強を通じて、何が起きたか、いわゆる歴史事実そのものは知っているが、それを動かした人たちの動機や心情はよく分からない、という。これによって、他国の歴史との間に心理的隔たりを感じた学生が少なからずいる。日本と周辺国の歴史問題に接した時、このような心理的隔たりに阻まれて、学生のなかに相手国のことを進んで知ろうとする意識が生まれにくい現状がある。

状況打開の鍵は、その心理的隔たりの取り払いにあると報告者は考える。これを実現するには、歴史的想像力の育成は大事である。歴史的想像力をそなえると、他国の歴史を一人間だという視点から見ることができて、真の歴史理解を得ることが可能となる。報告者はこれまでの教育実践で以下の二点に力を入れて、歴史的想像力の育成を模索する。

一つ目は、学生たちのなかに、同じ人間という視点を取って、外国の歴史を見る感覚を養うことである。一つの試みとして、報告者は自身が取材したことがある中国共産党古参幹部の人生ストーリーを講義内容とする。中国革命に身を投じた老幹部は、長い生涯にわたって数々の苦難を経験した。そのなか、公職からの追放や娘との死別は、人の心の琴線に触れるものばかりである。老幹部の人生ストーリーに共感を覚えた学生は、はじめて一人間の目線から現代中国を見るようになる。以前なら、現代中国の出来事をまるで別の星のこのように捉える彼らは、いまは自らの人生経験、生活感覚を動員して理解に努めるようにする。

二つ目は、中国の歴史教育の特徴を紹介することである。中国の歴史教育は、愛国主義教育の分量が圧倒的に多い。その愛国主義教育は、戦争に関して、自国の甚大な被害状況の宣伝に力を入れるわりに、戦争の要因、軍事対戦、戦争下の社会生活などの諸側面についての解説を軽視する。このような愛国主義教育は、ナショナリズムの高揚に役に立つかもしれないが、真の歴史理解とは程遠いであるため、歴史の和解と平和志向の確立につながりにくい。

中国の歴史教育の特徴を知ると、多くの学生が日本の歴史教育のあり方を思考するようになり、やがてその盲点に気づきはじめた。その一つは、日本の歴史教育は、自国の被害状況を懸命に訴えるが、日本に侵略された諸外国の被害状況にあまり触れないということである。このようなことは、他国との歴史認識上の隔たりが生じた一因となっている。学生たちのレポートから、こうした盲点を認識できた学生の中に、外国との隔たりを埋めようとして歴史を主体的に勉強する意欲が次第に高まることが窺える。

以上の試みを通じて、報告者はある程度の手応えを得られたと同時に、多くの課題への対応の必要性を認識しはじめた。歴史理解と歴史の和解に関して、歴史知識は無論重要な意味を持つが、絶えず変化する双方の国民感情、国内政治および二国関係も極めて重要である。とりわけ後者のことを考えると、歴史教育の模索は完成形が見えない旅と言えるかもしれない。